いカフェテリア

投資移民として南米に

鄭さんは１９８７年に投資移民としてアルゼンチンに渡った。しかし、当時のアルゼンチンは経済規模が小さく将来を期待できなかったため、１９８９年にブラジルで恩赦が出るという情報を得てブラジルに入国し、難なく永住ビザを取得してブラジル生活が始まった。

妻（７９）と当時大学１年生だった長男、浪人生の次男、高校３年生の三男も一緒に移民し、仕事の目的以外に、韓国では子どもたちが歪んで育つという思いもあった。

鄭さんは中央大学教育科を中退後、韓国では産業経済新聞の勤務を経て、社団法人世政経営研究所理事長、国民大学校経済研究所研究委員を務め、政府関連のプロジェクトに必要な予算などの調査を行っていた。

「ブラジルは政治が悪いのは明らか。道一つとっても、各所に亀裂が入っていたり穴があいていたりするのは、予算を全て使わず、誰かのポケットに流れているという現れ」と、公的資金投入のプロとしてブラジル政府への評価は厳しい。

ブラジルに来て最初はサンパウロ市アクリマソン地区に家を購入し、穏やかな生活を送っていた。しかし、数年後に妻が知人の保証人になり、借金のかたとして３軒あった家の２軒を売りに出すことになってしまった。

最終的には３軒目の家も売りに出し、３年前からボン・レチーロ地区に引っ越し、妻と次男家族、三男と一緒に生活している。

「三男だけが結婚していないのが心配で」と、国が変わっても子を想う親心は変わらない。

「ブラジルの好きなところは人々の国民性。強盗や怠け者も目立ち、私も携帯電話やパスポートを盗まれたことがあります。ですが世界から観光客が来るのは、やはりおおらかな人々を求めて来るのだと思います」と、ブラジルの人々への眼差しは温かい。

「家では韓国料理を食べますが、昼食を食べたらすぐにお腹が減ります。それに比べて腹もちの良いフェイジョアーダもすっかり好物になりましたよ」（つづく）